

若城希伊子

光源氏の世界



朝日文庫

光源氏の世界

朝日文庫

1990年4月20日 第1刷発行

著 者 若城希伊子

発 行 者 八 尋 舜 右

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

© Kiiko Wakashiro 1990 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-260592-8

兀凉氏の世界

若城希伊子

表紙・扉 伊藤 鑛治

はじめに

源氏物語を読むようになってからどれぐらいの月日がたったであろうか。

私の中で源氏物語はなん度もその姿をかえ、新鮮ないのちのよみがえりを見せて、この国のこのころの歴史を教えてくれた。

光源氏がどのような男性で、なぜ魅力があるのか。源氏物語を読むのは知らない間に日本の男ごころをさぐれるからであろうか。少女たちは千年このかた、この物語を源にして光源氏に好まれるような女人になろうと心がけてきた。そこから優雅で華麗なさまざまな女人たちが、頁をくるごとにっこりと笑ってこちらへとびだしてくる蝶のような舞い姿を見せてくれた。

光源氏は日本の男の理想の姿という。なぜそうなのか、それはわからずに源氏物語の世界にのめりこんでいった。

はじめは光源氏をめぐる女人のひとりひとりが、私に語りかけてきたのであった。玉かつらが、六條の御息所が、朧月夜の尚侍や、明石の上がそして紫の上。それぞれが強

い個性を持つしたたかな女人たちであった。そのなかで、光源氏はついには立派な日本の男の心をしめしたのである。どの女人たちも彼をたたえ、彼とのつきあいのなかで自己の道を生きてみせる。そして光源氏は、彼女たちをおして、日本の男のあるべき姿をみせた。

ある時、私はこの物語が歴史小説である、と思った。それは、光源氏の中に、多くの日本の男の叫びがきこえてきたからである。源融を始めとする光源氏のモデルといわれている人びとは、もちろん日本の歴史のなかに生きた人である。私たちは、この物語の主人公光源氏にどこかでかならず出逢っていた。ひとりの人物ではなくて、古代から、神話のなかからよみがえって、俺はこう生きたのだ、と叫ぶ声は、次にでてくるころなき人によって消されてしまう。しかし、あとにつづく私たちはその声を聞くのである。源氏物語が歴史物語だというのは、語り部であったに違いないこの物語を書いた女人の態度にそれが感じられるからだ。

源氏は王氏であって天皇家の皇子である。日本の歴史で、天皇家に生まれながら、その志を得ずに、この世を去った美しく、気高く、雄おしい皇子たちがなんと多かったことか。

これは鎮魂の物語だ。そうに違いない。そのように私は信じるようになった。鎮魂す

るとは、この世で志を得なかったたましいを鎮め、慰めることである。ほとんどの芸能は、今そのようにして源を発し、私たちに伝えられてきた。そして源氏物語は、きっとこの物語のできたところに生きた人の祈りによって生まれたのだろう。

あらゆる道の祖であるといわれるこの物語のころは、日本の男の理想の姿とところを伝えた。虚空にあるモデルの人びとの声が物語のなかから私たちをみちびく。

源氏物語が読まれ、語られ、思いだされるたびに鎮魂の目的は少しずつかなえられて今もまだ、これからも日本人の胸に光源氏像を描き続けるだろう。遠く日本の男は須佐之男命に始まり、日本武尊や、聖徳太子にそのただけしさも、やさしさも、心の大きさも、また、それぞれの暗い闇をふくんで歴史のうえを走る。大津の皇子の哀しみも、早良親王の怒りも、時代の流れに呑みこまれて、王朝時代の、じかに源氏のモデルになった人たちに志をつがれる。融や業平や、道真や高明や平安朝の男たちは、優雅な女人たちの仮名ぶみによって、みごとに光源氏というひとりの人物によみがえった。

もののあはれを知るころが、物語の登場人物たちを、どこまでもやわらかく、やさしく、美しい花のように見せる。しかし、そのころの奥に闇があり、自己の悪と闘って正しく生きる強いエネルギーがある。源氏物語は、日本人それぞれのころに花と咲く。それぞれの心のなかで、光源氏を花として、この民族は夢みてきたようだ。花の姿

は優雅で、華麗で、わたしたちに光をそえる。しかし、光源氏の物語は彼の苦悩の一生をえがいたものなのだ。身分ひくき母から生まれたゆえに、里びとの心を心とすることのできた高貴な男の物語である。孤独なたましいが、もとめつづけたのはいのちの花であった。それゆえにこそ、光源氏のイメージは、私たちのところに美しく遺る。

心なき身にもあはれは しられけり

鴨立沢いづたさきの 秋の夕ぐれ (西行)

光源氏が生まれてから百年あまりたったのちにこの世にあった西行は、わが身を「ころなき身」といつている。ころある時とは、もののあはれを知るころをテーマとした、源氏物語の時代のことであつたろうか。この新古今の歌人は、やはりまことのころの花を求めて隠者生活に入った。西行の心は花を見るたびにみだれ、しかし、花をもとめてやまない。花は桜だが、光源氏はその花のもとで、自己の身を一体化することのできた人としてえがかれる。

光源氏の心は、時に暗く、この世の憂きことに想いしずむ。しかしなぜか、物語を読む私たちは、そこに花を見る。中世の日本のすべての道が、この人の世界から生まれ出た。それぞれが花をもとめ、乱れる心を正して歩む。

日本が戦いにやぶれてまだ日が浅かったころ、三田の慶応義塾の演説館で行われていた、折口信夫先生の源氏全講会がまぼろしのように瞼によみがえる。あの時、うすぐらい部屋のなかで現代の常識をこえた光源氏の世界が、きくものの心に先生の声をおしえてつたわってきた。以前に光源氏を愛した女人をたどって見たことがあったが（『源氏物語の女』日本放送出版協会刊）その時から、いつか光源氏その人の根源をさぐりたいと希っていた。

折口学の源氏のむこうに国学の姿を感じる。かつて池田彌三郎先生は

「折口先生はね、古事記、万葉で培われたやまとごころが、源氏物語では、具体的な日常生活としてえがかれたのだ、と言われているんですよ」

と教えてくださった。国学とは、「清純な生活を民族にもちきたそう」という心をもった人たちが、「自由な道念の基礎を国文学に置いたもの」と折口先生はのべられている。光源氏の世界のなかには、自由な道念がある。清純な民族の生活がある。そう思っ

って源氏物語にふれば、花はいたるところにある。

「本居宣長」を書かれた小林秀雄さんは、人間が科学というものを知りだしてからまだ六百年にしかない。それまで数万年にもなる人間の歴史のなかで、神秘が信じられ

てきたといわれている。千年前の物語の世界は、今と変わらない人ごころをしめしている。朝夕に人びとが信じた天地のところが正しさと悪さをわけていた。天地の理念は神秘としかいいようもない。

男ごころと、女ごころの織りなす世の中で、光源氏もまた清純な道念をもとめて生きる。

光源氏の悪の魅力が、このうえもなく女たちを惹きつける。悪が惹きつけるのではない。五体の奥から衝き上げる悪を清純なものに変えることのできた日本の男を人びとは恋した。

折口先生のお考えをもとにして、光源氏の世界をさまよってみた。この本を書くにあたって、多くの方がたのお力をいただいた。あちこちで源氏物語をご一緒に読ませていただいているうちに、みちびかれて、そのたびに新鮮な光源氏像があゆみよってきたのである。私ひとりの力ではない。歴史小説を書くときと同じように、千年前のさまざまの声が私をみちびいて、まことの光源氏の世界へ誘われたようである。

なお、引用原文は朝日新聞社版・日本古典全書『源氏物語』による。

目次

序 3

その一 闇に咲く恋 11

その二 柔らかなるなむよき 39

その三 あやしの人の親や 75

その四 物語こそ道々しく委しきことはあらめ 109

その五 くちをしの花の契りや 137

その六 空にみだるる魂 161

その七 須磨隠棲 197

その八 姫君誕生 229

その九 若き日の罪の報い 265

その十 大空をかよまぼろし 307

主な参考文献 336

光源氏をめぐる人物系図 337

『源氏物語』 関連年表 338

『源氏物語』 関連地図 340

装幀 多田 進

挿画 安沢阿弥

写真 若城誠一

図版 吉沢スタジオ

闇に咲く恋

●その一



尋ねゆく幻もがな つてにても

魂^{たま}のありかを そこと知るべく

(帝)

桐壺の帝は、光源氏の母桐壺の更衣が逝^なくなつた時、この大きな歌を詠んで哀しみの心を表わした。

「繪にかける楊貴妃^{かたち}の容貌^{かたち}は、いみじき畫師^{えし}といへども、筆限^{かぎり}ありければ、いとにほひ少し。太液^{たいえき}の芙蓉^{ふよう}、未央^{びやう}の柳^{やなぎ}も、げに通ひたりし容貌^{かたち}を、唐^{から}めいたる粧^{よそひ}はうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思^{おも}し出づるに、花鳥^{はなどり}の色にも音^ねにもよそふべき方ぞなき。朝夕^{あさゆふ}の言種^{ことぐさ}に、翼^{はね}をならべ、枝をかさはむと契らせ給ひしに、かなはざりける命の程ぞ、つきせずうらめしき」

光源氏の母桐壺の更衣は、世にたぐいない美しい人であつたのに、光源氏を生んで間もなくこの世を去つた。桐壺の帝はこの更衣を慕われ、そっくりだといわれる先帝の四の宮を内裏に迎えられた。それが藤壺である。藤壺の女御は内裏の藤の木が坪庭に植えられた局藤壺に棲まわれていたので、藤壺の女御と呼ばれた。

光源氏が初めて運命的なこの女人と出逢ったのは、内裏での継母と継子の対面においてであった。後に光源氏は継母藤壺を恋い慕って、その想いが彼の人生を左右するようになった。その人は、逝き母桐壺の更衣とよく似ていると、女房から言われただけで、幼い親王の心は、藤壺をまたとない女人と思うようになる。光源氏はまだ内裏に棲んで、父帝の庇護のもとにある幼い親王であった。やがて、十二歳で元服し、加冠の儀が行われて、臣下の席に連なり、初めて光源氏と呼ばれるようになるのだが、藤壺との出逢いの時には、まことに帝の親王光君なのであった。

世の人びとはなぜか、この光君と藤壺とを並べて噂しあうようになった、と桐壺の巻に書かれている。

「なほにほはしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光君と聞ゆ。藤壺ならび給ひて、御おぼえもとりどりなれば、かがやく日の宮と聞ゆ」

光君とかがやく日の宮と人びとが並び称したのは、いわば、世の人たちがふたりにつけた渾名であった。なぜ藤壺は桐壺の帝と並んで人びとからたたえられなかったのか。何げなく書かれているこの言葉で、いやおうもなく私たちは光源氏と藤壺

との後の恋が成就することを希^{ねが}うようになってゐる。

みづら^{みづら}を結い、まだ童姿^{わらわ}の光源氏は父帝のうしろについて、藤壺の御殿に自由に出入りすることができた。そのころの習慣では、女はみ簾^すの奥深く潜んでいて、男に顔をみせてはならず、やがて源氏も十二歳の元服と同時に、後宮の世界から離れねばならない。幼い心に刻まれた実の母とそっくりといわれる継母が憧れの女人になるのは当然のことといえよう。

「な疎^{うと}み給ひそ。あやしくよそへ聞えつべき心地なむする。なめしと思^{おも}ひさで、らうたくし給へ。つらつきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通^{かよ}ひて見え給ふも、似げなからずなむ」

帝は幼い継子をまことの子と思つていとしんで欲しい、と藤壺に言つたのである。継子が継母に恋をする。洋の東西を問わず、今昔を問わず、不倫の恋である。そして、源氏物語には光源氏が経験していく特異な恋の世界がまずここから繰り広げられていく。

開卷第一の桐壺の巻を経て、私たちはつぎの帚木^{ははきぎ}の巻に導かれると、すでに光源



京都御所

萩壺。

壺庭に萩が植えられて

いるのが萩壺。

藤壺と

幼い源氏が出逢ったのは、

このような

奥殿のいち隅であつた。

おきの水陰に萩壺